

野口史学の下部構造

村尾 行一

序 章 史観と史学

「史観」の原語は“Geschichtsanschauung”ですから、それは「歴史の見方」が原意で、これをより積極的に語積しますと「歴史なるものに対する見解」となりましょう。とすれば「史観」とは歴史的事実（形而上事実ないし精神的事実と形而下事実ないし物質的事実）に対する当該人物の見解でありましょう。そして「史学」とは積極的な意味での「史観」を「赤い糸」として歴史的諸事実を体系的に論述したものではないでしょうか。

この私見が正しければ、『日本原記・続編』と『日本の精神風土の形成論』は貴兄の独自の「史観」つまり「野口史観」による貴兄の独自の「史学」つまり「野口史学」と受けとめるべきものの労作なのであります。そして私はこの二労作に賛同する者の一人です。

そこで本日はこの二つの労作のいわば“下部構造”である農業文化についての愚見を述べて、貴労作に対する読後感の報告に換えます。

第一章 「火」と「水」の複合文化

近代日本では「農業」といえば水田稲作と先ず認識します。だから「農業が始まっているか」との歴史的・考古学的問題意識はこの「米本主義」から発します。それを実証的に明かにしようとする行為は水田遺跡の発掘であり、ライスオパールの確認であり、水稻に係る文献の探索であります。しかし私は「田畑」という表記、「畑」が国字であることに拘泥するのです。「田」一文字でシナ文化*は“田”も“畑”も表意させました。つまり「田」は農耕地一般を意味する文字なのであります。

*私はこの拙稿では「文化」をその原語“culture”<cultura>の原意である「農耕」に強く引き寄せて用います。

しかしヤマト文化はそれではしっくりしません。そこで陸田を意味する「畑」なる文字を創作したのです。つまりヤマト（以下「日本」と表記します。）の農業文化は「田畑」という二文字でしかその農地を全体的に表現することが出来ないのであります。だから日本農業は「田」と「畑」の二元的営為なのです。

ところで、「畑」は「火」と「田」の複合文字です。すると「畑」とは「火と密接不可分な農地」と日本農業文化は概念するのです。対して「田」は水田をのみ意味する文字に狭義化させました。ということは日本農業は「火」と「水」との二元的文化なのです。これは「米本主義」に

対する根源的な批判を意味します。そして「畑」の原基形態は「焼畑」と解すべきでしょう。
こうした認識は縄文文化のオータナティヴな理解に通じます。

第二章 縄文文化の基層は畑作文化

日本の常識では縄文時代を狩猟採取の時代、つまり農業以前の時代としています。そしてこの常識を生んだのはアカデミズムの「米本主義」史観であります。しかし私は高津時代から、あのような土器を製造する高度な時代文化が農業以前の時代文化であるはずがない、と出てきました。この幼心はあの巨大な建造物の発見や文化的レベルの高い出土品の発掘やらで、実証された思いであります。つまり縄文文化は畑作文化であり、その基層は焼畑、つまりシナ・半島文化という「火田」文化であると思っています。このことは縄文2土器のあの素晴らしい火炎調文様と関係があるのではないのでしょうか。

付言しますと、アイヌ文化も単なる狩猟採取のそれではないと、国有林・林業経営研究所時代の度重なる北海道調査で感じました。さらに付言の付言を申しますと、アイヌ語は琉球語とともに原日本語を顕著に含んでいるとの見解が日本語学では有力になっているそうです。

第三章 照葉樹林帯文化と檜林帯文化

従来、焼畑は照葉樹林帯文化、つまり貴州省・雲南省～シッキム・ブータンをハイマートとする暖帯文化とのみ把握する意見が当の文化人類学者でさえ定説であります。しかし温帯・亜寒帯のドイツ語圏でも焼畑がつい最近まで行われていました。日本でも日本海側の東北地域でも火入れ技術の高さを含む見事な焼畑をやっています。つまり、日本でさえ焼畑は西南山地の専売特許ではないのです。

すると温帯文化である檜林帯文化の農業の原基形態もまた焼畑ではなかったのではないかという思念が頭に浮かんできます。こうした考えは日本文化の照葉樹文化と檜林文化の二元性を重視することにつながります。そしてこれを地域的・時代的次元で説きますと、畑作対稲作、縄文対弥生という対概念となりましょう。水田稲作の東進・北進は決して古い時代のことではない。その最盛期は近世・近代であります。古いといえば平安時代の征夷・征東なる「軍事」は文化的には水田稲作の武力的「輸出」が基本動機だったのではないのでしょうか。

終章 「昆布の道」 二元論から三元論へ

このように、私は二元論者でありました。ところが今回、幸いにも貴兄の労作を拝読して、貴兄のライトモチーフが「縄文・弥生・天孫」の三元論であるからには、野口史学の下部構造もまた三元的であらねばならぬと、禅宗の意味での「覚悟」をいたしました。

しかしこの公案は浅学菲才の私には解けません。貴兄のご教示を乞う次第であります。

とは申せ、私のような者でもこの公案を解くヒントめいたものをもってはいます。それは「昆布の道」と総称しておきます第三の道として、要するに蝦夷地から琉球へと通う海路を軸とした東北北アジアを日本文化の第三の源流としたいという愚見であります。私がかねがね何故琉球が昆布文化の土地なのか、そして京大阪がやはり昆布文化の土地なのかに注目していました。それは江戸時代の表現を借りれば北前航路とその延長航路が蝦夷地と京大阪、さらには琉球とを結びつけたからでしょう。蝦夷地と琉球に原日本語が残るということもその証左の一つであります。そして私は蝦夷地を文化の巨大な配電盤と位置つけたいのです。その最大の出力が北前航路+南西航路でありましょう。江戸と上方で高級品として珍重がられた「唐錦」が実は中国貴族の古着が蝦夷地を経由して流入した物です。そしてこれが別名「韃靼錦」といわれたことに注目したいのです。

日本文化の源流は、従来の史観では、江南（主軸は長江文化）と華北（その主軸は黄河）であります。例の照葉樹文化論も江南源流説のコロラリーであります。しかし私は上述したことで示唆したように、沿海州 - 蝦夷地を主流とした東北北アジアから日本海側東北部への文化の流入を重視したいのであります。これを日本文化の第三の源流と把握すれば「檜林帯文化」という史観では割り切れなかった「余り」の部分をも包摂できるのではないのでしょうか。とすれば三元論である野口史学に下部構造を与えることになるのです。

とはいえこの「第三の道」説は照葉樹林帯文化論や檜林帯文化論、ないし弥生文化論や縄文文化論のような生産文化・生活文化という内実をいまだ持っていません。換言すれば思いつきの域を脱していません。「公案が村尾には解けていない」と申した所以であります。だから貴兄に教示方を乞うた次第なのです。こうお願いして、この雑文を結びます。